

■ 優秀会社史賞 ■

『阪神電気鉄道百年史』（2005年12月 957p 27cm）

阪神電気鉄道株式会社発行

本書は、1985年刊行の『阪神電気鉄道八十年史』（以下では、『八十年史』と表記）で第5回優秀会社史賞を受けた阪神電気鉄道株式会社が新たに編纂した社史であり、第15回優秀会社史賞にふさわしい優れた出版物として、選考委員会で高い評価を得た。本書のメリットは、以下の3点にまとめることができる。

第1は、本格的な社史として、経営環境、経営行動、経営成果の全般にわたり、一次資料にもとづいて、重厚な記述を展開している点である。昨今、日本では、景気回復にともない、社史の刊行件数が再び増加傾向をたどりつつあるが、その制作過程では、期間短縮を第一義的に追求するなど、安易な手法も目立ち始めている。本書は、本格的な社史の魅力のみごとに体现したものであり、その刊行自体が「お手軽」な社史の流行に対する警鐘となるものである。

第2は、『八十年史』の対象時期についても、新たな角度から光を当てることに挑戦し、成果をあげている点である。このことは、『八十年史』がもっていたメリットを継承することと、矛盾しない。一次資料を活用して事実に基づいた叙述を展開すること、同業他社（とくに最大のライバルであり続けた阪急電鉄）との経営比較を行い阪神電鉄の特徴を鮮明にすることなど、『八十年史』が有していたメリットを、本書は受け継いでいる。しかし、それだけではなく、本書は、『八十年史』の対象時期における新事実の発見や、既知の事実に対する新たな評価づけにも、成功しているのである。創業までの様々な事業計画に関する新しい記述、株主の動向に関する掘り下げた記述、『八十年史』で消極性が強調されすぎたきらいのある三崎省三に対する「広軌高速の都市間電気鉄道」信奉者としての積極的な評価、『八十年史』で短期的関与が強調されすぎたきらいのある島徳蔵に対する長期的視点に立った投資家という新たな評価……これらの点から、本書が『八十年史』に対して新機軸を打ち出したものであることは、明らかである。

第3は、久万俊二郎のリーダーシップのもとで遂行した西梅田開発と西大阪線延伸の2大プロジェクトについて、詳細でヴィヴィッドな叙述を行っている点である。ポストバブル期に花開いたこれらのプロジェクトは、阪神電鉄の企業価値と企業イメージを大いに高めた。阪神ブランドの向上という面では、Tigers等の関連事業が果たした役割も大きい。関連事業に関する記述が充実している点も、本書の特徴の一つである。

本書は完成度の高い会社史であり、注文をつけるべき点はほとんどない。あえて、特記すれば、次の3点になる。

第1は、阪神電鉄の沿線開発が、箕面有馬電軌（のちの阪急電鉄）のそれより「先駆的」だったという評価（第2章）は、妥当なものかという点である。評者には、タイミングの問題はともかくとして、ビジネスモデルの包括性の点で、日本の私鉄沿線開発事業のパイオニアは箕面有馬電軌だったように思われる。阪神電鉄と阪急電鉄との経営統合後に刊行される「次の会社史」で、この点の評価がどうなるか、注目したい。

第2は、阪神Tigersに関する叙述が中途半端な点である。重要な関連事業であるTigersについて、本書で『八十年史』より分厚い叙述がなされていることは、大いに評価できる。しかし、見出しを追う限り、Tigersについて語られるのは「活躍」（第5章）、「優勝」（第7章）、「優勝」（第8章）であって、Tigersの歴史のハイライトとも言える長期低迷とそこからの再生については、掘り下げられていない。球団経営に関する叙述も、手薄である。この問題を解決するような、充実した内容の阪神Tigers史が刊行されることを期待したい。

第3は、村上ファンド問題へ何らかの形で言及するすべはなかったか、という点である。本書が2004年度までを記述対象とした会社史であること、当該問題が進行中に刊行時期を迎えたことなどから、これがやや無理な注文であることは、評者も重々承知している。しかし、読者の関心の高さや、長く読み続けられるであろう本書の歴史的価値を考慮に入れば、例えば、「社長あいさつ」のなかで、村上ファンド問題へ一言触れるというような方法もあったように考える。

（橘川 武郎）